

「空手道で一番苦しかったこと」

2013年3月30日

月心会 西東京本部 浜田山支部

工藤 麻弥子

私は、当時小学校5年生だった長男のお友達が月心会にいらしたご縁で、親子で空手を始めました。我が家では、夫が他流派ながら琉球空手をやっていることもあり、私は前々から長男に空手をやってほしいと思っていました。

引っ込み思案な長男が、浜田山支部の中で楽しそうに空手をやっている姿を見るのはとてもうれしく、また、私自身も空手を楽しめるようになってきました。

そんな中、ぜんそくが悪化したことが原因でしばらく休んでしまったことをきっかけに、長男は空手に行けなくなってしまいました。

私が続けていれば、いつか戻ってくれるのではないかと思い、1人練習を続けましたが、長男は結局空手をやめてしまいました。

子どもが行かないのに母親が続けているのはおかしいのではないか、今がやめどきなのではないか……と悩んでいる頃に型試合で初めて入賞し、市川先生にこんな言葉をかけていただきました。

「よくがんばったね。やめないで続けるんだよ。」

空手が好きになっていた私は先生の言葉を聞いて、ああ、やめないでいいんだ、と救われるような気持ちになりました。

ただ、その後も私が続けることで長男にプレッシャーをかけるのではないかと思ったり、親子で楽しそうに励まし合いながら練習をしているみなさんの姿を見て、やっぱり親子空手の月心会に私がいるのはふさわしくないのではないかと思ったり、複雑な思いを抱えながら練習に通いました。今思うと、この頃が一番苦しい気持ちで空手をやっていたような気がします。

でも、先生や黒帯のみなさんが熱心に指導をしてくださり、浜田山支部のみなさんと交流させていただく中で、だんだんと、自分だけのために空手をやろうという気持ちになってきました。

型の技術はどんなに練習しても課題が残って終わりがなく、その意味では苦しい面もありますが、できなかったことが少しずつできるようになる喜びもまた大きいものです。組手に関しては、本当になかなかうまくならなくてめげそうになることもあります。その分吸収できることがたくさんあるのは楽しみでもあります。

親子空手という道からははずれてしまいましたが、これからも体が続く限り空手とともに歩んでいきたいと思っています。

最後になりましたが、初段受験という大きな節目を迎えられるまでにご指導くださった市川先生、黒帯指導者のみなさま、そして、一緒に練習をしてくれた仲間みなさんに心からお礼を申し上げます。